

記号のインデックス性の黄昏

——Bill Viola 《The Reflecting Pool》(1977-79) のメディア考古学的・現象学的分析

石田 英敬 (東京大学 (名誉教授)、アジア国際記号学会(ASIA))

発表要旨：

1. 問題設定

Roland Barthes が『明るい部屋』で定式化した「ça-a-été (それはかつてあった)」は、光と感光材料の直接的・物理的接触という技術的根拠に支えられている。本発表は、この確実性が写真・映画フィルム・アナログビデオ・デジタルという四つのメディア層においていかなる変容を遂げるかを論じ、Bill Viola の《The Reflecting Pool》(1977-79) をその変容の臨界点として分析する。この問いは 20 世紀から 21 世紀への「記号の知」のエピステーメ的転換を透視しようとする、より広い企図の一部をなす。

2. 四つのメディア層とインデックス性の段階的解体

写真の確実性は B・Stiegler の「技術的正定立性 (orthothéticité)」として記述できる——技術的支持体の物質的性格が意識の構成に先立って判断条件を設定する。この根拠はメディアの系列において変容する：写真 (光化学的直接接触) → 映画フィルム (仮現運動という脳の産物物によって ça-a-été が時間の流れに溶解する) → アナログビデオ (電磁気的変換の類比的連続性はインデックス性を保持するが「翻訳の連鎖」により直接性が稀薄化する) → デジタル (サンプリングと量子化がインデックス性の物質的根拠を原理的に切断する)。

3. 《The Reflecting Pool》——アナログの内側からのデジタルの発明

Viola が使用した 1 インチ Type C フォーマット (1976 年) はアナログ技術として初めてスチル・フレーム再生を可能にした。映像上半分 (宙吊りの身体 = 停止した信号) と下半分 (池の表面 = 連続する信号) を分かつ水平線は、意味の線である前に電気の線である。上半分はデジタルの論理 (離散的・再生可能な単位) を先取りし、下半分は断固としてアナログのレジームに属する。さらに本作は「劣化」を内部に組み込んでいる——反復再生による磁気的消耗が身体を溶解させる。この擬似劣化は「停止」が持続不可能であるという技術的条件のインデックス的証言であり、しかし写真の褪色と異なり、内容との物質的因果連続性を欠く——それは時間の真正な痕跡ではなく、信号システムの損傷である。

4. 「リアルタイムの砂漠」へ——結論的展望

デジタルはノイズを排除することで「完全な伝達」を実現するが、同時に記号が物質的条件の中を通過してきた痕跡を消去する——ボードリヤールの「現実の砂漠」に倣い、これを「リアルタイムの砂漠 (desert of the real time)」と呼ぶ。今日の観者の前頭前野はすでにデジタル的知覚の a priori を内面化しており、このデジタル的期待とアナログ映像の不一致が Stiegler の「補綴的ア・プリオリ (jugement prothétique a priori)」の神経的相関として審美的判断の回路を開く。Viola 自身が「洗礼」と呼んだこの作品は、メディア考古学的に読むとき洗礼の不可能性の証言となる——アナログの男は後ろ姿だけを見せて森に帰っていく。本発表はこの分析を通じて、Peirce が「sign」ではなく「medium」と言うべきだったと自問した地点に立ち返り、記号の知のエピステーメ的転換を問う。

参考文献： Roland Barthes, *La Chambre claire : Note sur la photographie*, Paris, Gallimard / Seuil (Cahiers du cinéma), 1980; Bernard Stiegler, *La Technique et le temps, t. 2 : La Désorientation*, Paris, Galilée, 1996; Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch*, Halle, Max Niemeyer, 1913. [邦訳：渡辺二郎訳『イデーオン 1-1・1-2』みすず書房、1979-84 年。]; Francisco J. Varela, Evan Thompson & Eleanor Rosch, *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*, Cambridge (Mass.), MIT Press, 1991; Bill Viola, *Reasons for Knocking at an Empty House: Writings 1973-1994*, ed. Robert Violette, London / Cambridge (Mass.), Anthony d'Offay Gallery / MIT Press, 1995; Jean Baudrillard, *Simulacres et simulation*, Paris, Galilée, 1981.